

『ことば』 ヨハネの福音書 1 章 1～5 節

1. ヨハネの福音書の目的

新約聖書には四つの福音書があり、ヨハネは四つ目ですので、第四福音書とも言われます。しかしヨハネの福音書が語っているイエス様のご生涯の流れは、他の三つとはかなり違いますし、他の三つの福音書には語られていない話も沢山出て来ます。そこに、この福音書の面白さと難しさがあります。そしてさらに言えることは、イエス様についての、またイエス様による救いについての私たちの理解と認識は、大きな広がりと深まりを与えられてくれます。

さてヨハネの福音書は全部で 21 章から成っていますが、元々は 20 章で終わっていて、21 章は後から付け加えられたと考えられます。20 章 31 節で「これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によつていのちを得るためである。」と、この福音書が書かれた目的が語られています。これを読んだ人が、イエスは神の子救い主であると信じて、その信仰によって「いのち」を受ける、つまり救われる、そういう明確な目的をもってこの福音書は書かれているのです。

四つの福音書それぞれの最初のところを比べてみると、それぞれの特徴が現れていて面白いと思います。マタイは、1 章 1 節で「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。」と記して、アブラハムからイエス様に至るあの長々とした系図から始まっています。マルコは 1 章 1 節で「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。」と、まさに直裁に福音の始まりを語っています。ルカは、1 章 1～4 節で「私たちの間で成し遂げられた事柄については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たちが私たちに伝えたとおりのことを、多くの人がまとめて書き上げようとすでに試みしています。私も、すべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬するテオフィロ様、あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていたいただきたいと思います。」とあるように、この書を献呈する相手への挨拶から始まっています。それに対してヨハネの福音書は、「初めにことばがあった。」という謎のような言葉から始まっているのです。他の三つの福音書が、イエス様の生涯を物語っているのに対して、ヨハネの福音書は、その生涯の深い意味や、そこに隠された神の御心を謎のような言葉で証ししているのです。だからこの福音書は、謎のような言葉を読み解いていくことが求められるのです。そこに難しさがありますが、しかしだからこそこの福音書を読むことによって、イエス様の生涯の本当の意味と、イエス様によって実現した神の救いの恵みの大きさ、深さに触れることができるのです。

2. 「ことば」とは

「初めにことばがあった。」というのは、1 節の続きを読んでいくことによって少しずつ解きほぐされ、語られていることが見えてきます。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」と語られています。「初めにことばがあった」は、神と共にあり、それ自身が神であったのです。「ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」、それが誰のことを言っているのかは、14 節に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」とはっきり記されています。「ことば」が肉となって私たちの間に宿られました。それは神のひとり子イエス・キリストのことです。その栄光は父のひとり子としての栄光だったと言われていることからそれは分かります。「初めにことば」とは、神のひとり子である主イエス・キリストのことなのです。

なぜイエス様のことが「ことば」と言われているのでしょうか。それがこの箇所において最も大切な問題ですが、それについては後で考えたいと思います。ここで先ず確認したいのは、ヨハネの福音書が、神の子であるイエス様が、全てのものの初めに、父である神と共におられたと語っていることです。2 節にはもう一度、「この方は、初めに神とともにおられた。」と繰り返されています。

3. 創造の御業の関わり

そして3節には、「**すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。**」とあります。父なる神と共におられたひとり子主イエス、「**ことば**」であるその方によって、この世の全てのものは造られたのです。イエス様は、全てのものを造った**創造者なる神**である、ということをこの福音書は語っているのです。天地を創造なさったのは勿論父なる神です。しかし、そこにはその父なる神と共に、まことの神であるひとり子主イエスがおられ、その創造の御業に共に関わっておられたのです。イエス様の関わりなしに成ったものは何一つないのです。後に肉となって私たちの間に宿って下さり、人間となってこの世を生きて下さったイエス様は、世の初めにおいて、父である神と共におられ、ご自身もまことの神として天地創造の御業に関わっておられた、それが、この福音書が宣べ伝えようとしている「**イエスは神の子救い主である**」と信じる信仰なのです。

それと同じ信仰を語っているのが、コロサイ人への手紙1章15～16節で「**御子は、見えない神のかたちであり、すべての造られたものより先に生まれた方です。なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造られました。**」とあります。この17節の「**御子は万物に先立って存在し、万物は御子にあって成り立っています。**」という文章の「**御子**」を「**ことば**」と言い替えれば、「**初めにことばがあった。**」というヨハネの福音書の冒頭の言葉になるのです。

このようにこの福音書は、御子イエス・キリストがまことの神である、というイエス様の本質ないし正体を語り示そうとしています。それが「**イエスは神の子救い主である**」と信じる信仰なのです。その信仰へと導くために、全てのものよりも先の「**初め**」における神による天地創造にイエス様が関わっておられたことを読者に見つめさせようとしているのです。「**初めに**」という言葉は、創世記1章1節の「**はじめに神が天と地を創造された。**」を意識させます。神による天地創造こそが、聖書が語るこの世界の「**初め**」です。その「**初め**」に、ひとり子であるイエス様が既におられ、まことの神として創造の御業に関わっておられたのです。このことによって私たちは、イエス様が、地上を人間として歩まれた方ただだけでなく、世の「**初め**」からおられるまことの神であり、天地を造った方であることを示されます。それが、ヨハネの福音書が語ろうとしているイエス様の本質ないし正体です。

4. 「ことば」による天地創造の意味

イエス様の姿は天地創造の御業の中に直接的に現れてはいません。しかし、隠された仕方で、そこにはイエス様の姿が示されている、というのがこの福音書の洞察です。その洞察の鍵となっているのが「**ことば**」なのです。

創世記1章に神による天地創造は、神が「**光、あれ。**」と言われたことから始まっています。神が「**光、あれ。**」と言われると「**光があった**」のです。その後も同じように、神が語られるとそのものが存在するようになった、という仕方で天地創造の御業が進んでいきます。つまり神は、「**ことば**」によってこの世界を創造なさったのです。ヨハネの福音書1章3節に「**すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。**」とあるのは、この創世記の記述を受けてのことだと言えるでしょう。天地創造は、神が「**ことば**」によってなされた御業なのです。

そもそも、神はなぜ「**光、あれ。**」と言われたのでしょうか。誰かそれを聞いている人がいるわけではありません。「**光、あれ。**」という神の命令に従って誰かが「**光**」を造ったわけではありません。だから別に言葉を語らなくても、ただ黙って「**光**」を造ってもよかったはずですが。しかし聖書は敢えて、「**神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。**」

(1:3)と語っているのです。それは、ここで語られた「**ことば**」が決定的に重要な存在だからです。神が「**ことば**」を語ることによってこの世界を造った、それは、神が語ったその「**ことば**」は、「**光**」を始めあらゆるものを存在させ、神の似姿である人間をも造り「**いのち**」を与える、そのような力ある存在なのだ、ということです。その「**ことば**」をヨハネの福音書は、人格的な存在である「**ことば**」として受け止め、そこに、神のひとり子イエス・キリストを見ているのです。神は「**ことば**」によってこの世界を造ったという創世記の記述は、初めに神と共にあり、ご自身が神である「**こ**

「ことば」が天地創造の御業を担っていたということを示しているのであって、その「ことば」が肉となり、この地上を人間として生きて下さったのがイエス様だ、とこの福音書は語っているのです。つまり、イエス様は、神が天地創造において語り、全てのものを存在させ、人間に「いのち」を与えた「ことば」、ご自身が生きておられる神である「ことば」なのだ、ということです。このことを信じるのが、「イエスは神の子救い主であると信じる」ことなのです。

5. 語りかける神

「ことば」による天地創造とか、イエス様の正体は「ことば」だというのは何だか難しい話ですが、その根本は、天地創造においても、ひとり子であるイエス様においても、神が私たちに語りかけている、ということです。「言葉」というのは必ず語られる相手があるものです。その相手が目の前にいるとは限りませんが、「言葉」は必ず誰かに向けて語られています。先ほど、天地創造における神の「ことば」は誰も聞いている者がいなかったと言いましたが、実はそれは、私たち人間に対して語られた御言葉なのです。神が「光、あれ。」と語られたのは、私たちが生きるために不可欠な「光」を神が造り与えて下さる、その恵みの御心を私たちに対して告げ示して下さっているのです。ですから天地創造における神の「ことば」は、虚しい空間に向かって語られたものではありません。神は「ことば」によって天地を造ることによって、私たち人間が生きることでできる場としてこの世界を整えて下さるという恵みの御心を私たちに示し、語りかけて下さったのです。そして神は「ことば」によって私たち人間を造り、「いのち」を与えて下さることによって、私たちを、神の「ことば」を聞き、それに応答して生きる者として、つまり神と交わりをもって生きる相手として立てて下さったのです。

私たちは、「言葉」というものをそれほど高く評価できない、という思いをどこかで持っています。「言葉」というのはそんなに信頼できるものではない、大事なものは「言葉」よりもむしろ「行為、行い」だ。「言葉」はいくら語られても、それによって人が生かされるわけではない。むしろ大事なものは「行為、行い」であって、行い、行動の伴わない「言葉」は虚しい、そのように思っていることは多いのではないのでしょうか。私たちの歩みにおいて、人々と共に生きている人生において、私たちは、「言葉」の虚しさをいやという程体験しています。「言葉」は、勿論人を慰め、支え、助ける働きをすることもあります。同時に人は「言葉」によって嘘をつきます。人を騙し、陥れ、利用します。人の「言葉」にまんまと載せられて痛い思いをする、ということもしばしばです。私たち人間が語る「言葉」は、時としてまことに不誠実な、愛のない、人を生かすどころか殺してしまうようなものとなっているのです。だから、「言葉」というのはそんなに高く評価できない、「言葉」だけではダメだ、「言葉」よりもむしろ行動だ、という思いを私たちは抱くのです。

けれども、「初めにことばがあった。」の「ことば」は、私たちが語る人間の「言葉」ではありません。神が語られる神の「ことば」です。神はその「ことば」をもって私たちに語りかけているのです。それは、神が私たちとの間に、愛の関係を築こうとしているということです。私たちを、愛する相手として立て、互いに愛し合って生きるパートナーとしようとしている、ということです。神が「ことば」によってこの世界と人間を創造されたというのは、神がこの愛の御心によって世界を造られたことを意味しているのです。「ことば」をもって語りかけて下さる神の愛こそが、この世界と私たちの存在の起源、根源であり、私たちの人生を支える土台なのです。「初めにことばがあった。」という冒頭において私たちはこの神の「ことば」、神の語りかけ、神の愛を見つめるべきです。そうすれば、この「ことば」の内にこそ「いのち」があること、またこの「ことば」によって成ったものは生き生きと生かされることが分かるのです。

このように、初めに神が天地を創造された時から、神は「ことば」によって私たちに語りかけておられたのです。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」というヨハネの福音書 1 章 1 節はそのことを言い表しているのです。そしてその「ことば」が、肉となってこの世に来られ、一人の人間として生きて下さった、それが主イエス・キリストです。イエス様が人間となってこの世を生きて下さったことによって、神は私たちに語りかけておられ、恵みの御心を告げ知らせて下さっています。そして私たちを、その語りかけに応じて神と共に生きる者となることへと招いておられるのです。

6. 罪と救い

しかし、最初の人間アダムとエバ以来、私たちはその神の語りかけをきちんと受け止めていません。神の御言葉を聞こうとせず、それに応えようとせず、神と共に生きようとし、神との交わりを重んじることなく、神なしに生きようとしているし、神なしに生きることができると思っているのです。それが私たちの根本的な罪です。私たちの歩みには様々な問題があり、苦しみ悲しみがあります。それらの問題の多くは、互いに愛し合うことができずに、傷つけ合ってしまう私たちの罪や弱さによって生じていることです。それらの具体的な様々な罪の根本にあるのは、私たちが、神からの語りかけに耳を傾けていない、神の「ことば」に応答していない、神との交わりに生きていない、ということです。神の「ことば」を聞くことを失ってしまったことによって、私たちは暗闇に陥っているのです。

そのような罪の暗闇の中にいる私たちへの神からの語りかけとして、ひとり子イエス・キリストが遣わされました。このひとり子こそ、初めに神が天地を創造された時に、父なる神と共におられた、ご自身もまことの神である方であり、神がその恵みの御心によってこの世界と人間を造って下さった、その創造の御業に関わっていた、神の「ことば」なのです。この方が、この世界に、私たちのところに来て下さって、私たちの救いのための生涯を歩んで下さったのです。その神の「ことば」としてのイエス様の生涯を語っているのが、このヨハネの福音書です。イエス様が人間となってこの世を生きて下さったことによって、神の「ことば」は、つまり罪人を救って下さる恵みの御心は、ただ告げ知らされただけでなくて、具体的な現実となりました。イエス様はその生涯の全体において、神の「ことば」を、神の恵みの御心を、語るだけでなく生きて下さったのです。イエス様の生涯の全体が、神の「ことば」、神から私たちへの、恵みの言葉の語りかけなのです。

この福音書の 3 章 16 節に「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」と、この福音書のメッセージを凝縮したような言葉です。主イエスという「ことば」が私たちに語りかけているのは、この神の愛です。その愛の御心を実現するために、ご自身がまことの神であり、天地創造に関わっておられたイエス様が、神に背き逆らい、御言葉に応答しない私たち罪ある人間のところに来て共に生きて下さり、私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さったのです。父なる神はその主イエスを復活させて、新しい命、永遠の命を生きる者として下さいました。イエス様の復活において、神の恵みの御心が、人間の罪と死とに勝利したのです。この福音書の 20 章の後半にはトマスという弟子のことが語られています。彼は、仲間の弟子たちからイエス様の復活を告げられても、信じようとしませんでした。しかし、そのトマスの前に、復活したイエス様が現れて下さり、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」と語りかけて下さいました。トマスはイエス様の語りかけに答えて、「私の主、私の神よ。」と信仰を告白しました。彼はそうにして、イエスは神の子救い主であると信じて、イエスの名による「いのち」を受けたのです。この福音書によって私たちも、神の「ことば」であるイエス様との出会いを与えられます。そして復活して今も生きておられるイエス様からの、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」という語りかけを聞くのです。この福音書を通して、「ことば」であるイエス様が私たちに会って下さり、共に歩んで下さり、語りかけて下さることを信じ、願い、期待したいと思います。そして私たちが、イエス様の語りかけに答えて、「私の主、私の神よ。」という信仰を言い表し、「イエスは神の子救い主」とであると信じてイエスの名による「いのち」を受けることを願い求めていきたいと思ひます。

先ほど「ことば」についてお話ししました。それは人を傷つけたり、破壊したりしてしまうほどの実に恐ろしい力をもっています。しかし、生涯忘れられないほど傷つけられた言葉を投げつけられたとしても、「ことば」であるイエス様は、それを遥かに超えて、私を慰め、励まし、力づけてくれることがおできになります。

あなたには今、どのような「闇」がありますか。それがどのようなものであっても、「闇」はこれに打ち勝ちません。ヨハネは「この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」と語っています。これこそ、ヨハネがこの福音書を通して私たちに語りかけようとしているメッセージです。これがあなたの希望となり、生きる力となります。私たちは闇の中で右往左往するような者ですが、そのような私たちにキリストが「光」となってくれるということを信じ、この方に信頼して歩んでいきたいと思ひます。